

氏名	北澤 潤
ヨミガナ	キタザワ ジュン
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第483号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 「もうひとつの日常」を生み出すアートプロジェクトに関する研究 〈作品〉 Daily Life

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	日比野 克彦
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	伊藤 俊治
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	たほ りつこ
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	熊倉 純子

（論文内容の要旨）

筆者は、国内外各地の地域社会において地域住民を中心とする多様な参加者と共に「もうひとつの日常」を生み出すアートプロジェクトを実践している。実践者としての立場から現場を見てみると、そこではプロジェクトに関わることを通して地域住民の意識が変化していく様子が見受けられる。人びとの変化の過程と共に結果的に生み出される「もうひとつの日常」は、既存の地域社会における人びとの役割とは異なる関係性によって支えられている。その主体となるのは、必ずしもアーティストではなく、むしろ子どもを含む普通の人びとである。彼らはそこで何を経験しているのだろうか。

本論では、筆者がきっかけとなってはじまった「もうひとつの日常」を生み出すアートプロジェクトにおいて、地域住民を中心とした人びとの手で「もうひとつの日常」がつくられていくプロセスに着目する。些細な出来事と機微が重要となるアートプロジェクトの過程を紐解きながら、ここでの人びとの意識の変化とはどのように働き、何をもちがっているのか、その考察を通して他者へとひらかれた「もうひとつの日常」の可能性を明らかにしたい。また、地域に「もうひとつの日常」を生み出していくためには、問いを投げかけるアーティストとしての筆者と、プロジェクトを主体的に再創造する人びとのある種の共犯関係が不可欠であることを確認しながら、ここで導き出される「もうひとつの日常」の可能性が、現代日本のアートプロジェクトにとっての羅針盤となることを期待し、論を進めていきたい。

第1章では、「もうひとつの日常」を生み出すアートプロジェクトを捉える概念の構築を目指す。そのためにも、日本におけるアートプロジェクトの歴史を辿り、2000年以降に台頭する多様な人びととの関わりを生み出すアートプロジェクトの立場を整理する。次に、鶴見俊輔による「限界芸術」の概念をもとに、大衆に「見せる」ためのアートプロジェクトから、地域住民が「する」ためのアートプロジェクトへの転換を描写する。「もうひとつの日常」において人びとが獲得しうる関係性は、普段の日常の関係性から解放された特殊な共同性によって支えられる。この共同性が獲得される過程を明らかにするために、ここでは文化人類学における儀礼論を援用する。「もうひとつの日常」が生み出される過程と儀礼の過程を重ね合わせることで明らかになったのは、「もうひとつの日常」における共同性が儀礼における「過渡的状态＝リミナリティ」に生ずる日常の制約から解放された共同性としての「コミュニタス」の特徴を有しているということである。

第2章から第4章にかけては、筆者による「もうひとつの日常」を生み出すアートプロジェクトの実践事例を章ごとに取り上げ、関わる人びとの変化に焦点を当てながら考察する。まず第2章では、埼玉県北本市で2010年からはじまった、商店街の空き店舗を「居間」に変えるプロジェクト《リビングルーム》を取り上げる。初期段階では《リビングルーム》が、異質な場として立ち現れるが、プロジェクトが継続するについて、その異質さは日常的な風景として定着していき、それに抗うように《リビングルーム》の空間を一時的に変

貌させるイベントが行われるようになる。これらは、「もうひとつの日常」として日常の関係性を解き放つ力が失われた《リビングルーム》を土台として、新たに一時的な「もうひとつの日常」を再創造していく試みであったと考えられる。

第3章では、福島県相馬郡新地町の仮設住宅の中に「手づくりの町」をつくるプロジェクト《マイタウンマーケット》をとりあげる。特に《マイタウンマーケット》の準備、本番、打ち上げの段階を考察することで、「もうひとつの日常」がもたらす人びとの変化を明らかにする。主体となる子どもたちが《マイタウンマーケット》の過程を通して子どもから「大人」になり、また「子ども」に戻っていくふるまひは、変化というよりむしろ一時的な「変身」と言えるものであり、直接的に「大人になる」という特殊な役割転換を《マイタウンマーケット》によって経験している。

第4章では、茨城県取手市にある井野団地を舞台に団地の空き部屋を「太陽光で泊まるホテル」に変えるプロジェクト《サンセルフホテル》をとりあげる。ここでの限られた1泊2日の「もうひとつの日常」は、日中、夜、そして朝といった太陽の移ろいにあわせて刻々と変質し、その過程を過ごす人びとに普段の生活においては固定化された自分自身の役割を流動的にしながら、固定化した存在と対置される曖昧な存在へと一時的に生まれ変わることを実現させる。

終章では、以上の各章の考察を踏まえ、「もうひとつの日常」を生み出すアートプロジェクトの可能性についてまとめる。アートプロジェクトが持ち込まれた日常のなかで、「もうひとつの日常」の出現が継起的に引き起こされていく中で徐々にプロジェクトの主体は筆者から地域住民へと引き継がれ、結果的に地域住民による地域活動／行事として定着していく。ここには地域の日常に内在する儀礼文化が消滅しつつある現代において、日常にコミュニタスを再創造するきっかけとなる可能性を秘めた、これからのアートプロジェクトの姿があらわれていると言えるのではないだろうか。

（論文審査結果の要旨）

本論文は「日常」のなかに「もうひとつの日常」を生成させるアートプロジェクトの可能性と意義を多くのプロジェクトやフィールドワークを通じ具体的に考察したものである。

まず「もうひとつの日常を生み出すアートプロジェクト」の概念を明確に定義するため「日本におけるアートプロジェクト」の流れが時代を追って辿られる。その軌跡は一般の人々に「見せる」アートプロジェクトから地域の人々に創造的参加を促す「する」アートプロジェクトへの転換といえるものだった。こうしたアートプロジェクトの歴史的な変容を踏まえ、北澤自身がこれまでおこなってきた実践での成果を交えながら、本論文の核といえる「21世紀の小祭の再生」というヴィジョンが提示される。つまりかつて日本各地にあった地域に根ざす小規模な祝祭である「小祭」の特性に注目し、現代において「小祭」をいかに復活できるのか、またその時、アーティストはどのような役割を果たすべきなのかを問いかけてゆくのだ。

そうした思考の深化のために援用されてゆくのが人類学や宗教学の視点であり、ファン・ヘネップの通過儀礼論、ヴィクター・ターナーのコミュニタス論、柳田國男のハレ、ケ、ケガレの循環説、鶴見俊輔の限界芸術論などが引用され、繋げられてゆく。

北澤はこうした論点を丁寧にまとめながら自分が行ってきたプロジェクトの細部と結びつけ、結論として祝祭儀礼の進行と「もうひとつの日常」が生み出されてゆくアートプロジェクトのプロセスを対比させ、重ね合わせようとする。人類学や宗教学のタームをアートプロジェクトに取り入れることに関しては様々な不都合も生じるが、それらの共通項を驚掴みにすることで新たな視座を得ることも可能だろう。そのような北澤の、現実と向き合う積極的な姿勢を評価したい。

論文の後半は北澤自身によるアートプロジェクトでいかにして「もうひとつの日常」が生成してきたか、あるいは生成できなかったのかについての記録検証となっている。日常の中にもうひとつの日常が出現し、その時空で解放された人々の間に新しい関係性（コミュニタス）が生まれる可能性が示された。実践と論理を結びつける新たな論考として注目すべきものといえるだろう。

(作品審査結果の要旨)

本作品は、日本において、過去20年間に各地に広がり、ますます盛況を呈する「アートプロジェクト」である。なかでも、共創の場を重視する日本特有の傾向として、地域住民を中心とする多様な参加者と共におこない、アーティストが活動の契機や仕組みをつくり、一般の人々が活動の担い手となるシステム型の「アートプロジェクト」である。申請者が日本各地で数多く実践した「アートプロジェクト」を本学美術館での博士展示にあたり、共創の場を重視するプロセスのダイナミズムを直に伝える展示として、プロジェクト室のような空間を展示した。プログラムの日程表、ドローイング、配布小冊子、ワークショップの第一次資料を収めたファイルボックスが並ぶ棚には、ナンバリングが貼られ、躍動感溢れる空間を創出した。発表に駆けつけた参加地域住民も美術館での展示に活力を与えた。精力的に数多くの実践を行った結果、地域住民を中心に参加者による自立した活動を生み、ワークショップによる制作物やシステムの洗練や個別のインパクトより、分析対象として信頼するに足る個体数の資料を積み上げ、分析と評価を繰り返す研究プロセスを提示した。

本作品は、コミュニケーションの場となる「もうひとつの日常」を生み出すことが主たる目的である。その概念的枠組みは、文化人類学の儀礼論を援用して「もうひとつの日常」の共同性が儀礼における「過渡的状态＝リミナリティ」に生じる「コムニタス」の特徴を持つとし、その構造モデルを明らかにする。「もうひとつの日常」を、継続的に出現させて、次第にプロジェクトの主体は、申請者から地域住民へと引き継がれる。結果的に、地域住民による地域活動/行事として定着してゆき、地域の日常に内在する儀礼文化が消滅しつつある現代に、日常にコムニタスを再創造する契機となる可能性をもたらすという。申請者のワークショップは、折々の「ハレ」の非日常と比較して、限りなく日常にちかい「もうひとつの日常」、その慎ましい微かな芸術的行為や時空間にこそ日本の儀礼を見る。

アートプロジェクトの現状が先行し、理論化が待たれる今、数多くの実践と分析、手法の構造モデルや理論化を同時並行で試みる本作品は、希有な実践研究成果の先例と言える。

大学美術館での博士審査展において、審査員一同の高い評価を得た。

(総合審査結果の要旨)

人は人と関わろうとする。
自分というひとりの人間の範囲から外の世界へと手を伸ばす。
北澤が行っているアートプロジェクトにおける表現力は、
この自己が外の世界へ出ようとする力である。
それによって、対話、会話、出会い、集い、溜まり、が生まれる。

人は、自らその力に争わずに身を委ねることが出来る場合と、
その力のバランスがうまくとれず、不安定になる場合がある。

北澤は自己の外へ出ようとする力の所在を見失いかけている「人」を見つめ続けてきた。
これらの力は人と接する場で認識することができる。
ゆえに彼の行為は、現代社会と人の在り方を問うことになり、
北澤のアートプロジェクトが社会的問題を処方するという見え方にもなっている。

人と関わることをアートプロジェクトの軸としている北澤が、
閉ざされた空間である美術館での作品として、
展示室に出入りする自分を対象としたアートプロジェクトを制作した。

展示期間中も活動し続ける日本各地の現場へ行き来する日々のドキュメントである。
この作品は自分を被験者として、人間の日常と非日常を改めて見つめるものとなり、
次なる活動につなげていく起点となった。

共感する力をもとに構築されていく北澤の活動は、
今後、これまでアートが直接関連しなかった場へも関わっていく機会を得ていくであろう。
社会の中で実践を重ね、自己考察しながらアートプロジェクトを現代社会の中で機能させ、
評価されるべきものへと確立させ、
これまでにないアートの姿を創り出していくであろう。

北澤潤は、現代社会の中における新たなアートの分野に挑戦する優秀な表現者であると、
評価し、審査会一同は合格と認めた。